

Give a nickname for this Bulletin!

日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター・ニュース

The Bulletin of JSPS Research Station, Nairobi

31 July 1998 No. 4

小屋番のねがい

足達太郎

(日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター駐在員)

学振駐在員としてナイロビ・センターに赴任してから4か月がたった。わたしはアフリカ研究者としてはかけだけで、センターの仕事の内容もあまり知らないままここへやってきた。センターの仕事には季節性があり、日々あらたに知ることもおおいのだが、駐在期間の3分の1がすぎたいま、センターと駐在員の日常について感想をのべてみたい。

ナイロビ・センターは、日本のアフリカ研究者にとって、登山の際に利用する山小屋のようなものかもしれない。山小屋は、登山者に便宜とやすらぎをあたえ、山についての情報を提供する。センターもまた、学術研究をおこなう研究者に、便宜と情報とやすらぎを提供するのが業務である。駐在員とは、山小屋にすみこんではたらいている番人のようなものか。

1965年に「アフリカ地域研究センター」として設立された当初と現在とでは、センターの性格にかなりちがいがあるようだ。ふるい訪問者ノートによれば、ひとむかし前のセンターは、比較的かぎられた分野と所属機関の研究者たちが利用する施設だったようである。しかし現在は、訪問者の数と多様さで当時とはとても比較にならない。これは近年のアフリカ研究の分野のひろがりと研究者数の増加からすれば、うなずけることであろう。また最近の傾向として、日本人よりもアフリカ人の訪問者の方がおおくなっている。

むかしのセンターを知る人たちによると、かつてのセンターは、日本のアフリカ研究者たちがつどうサロンのようなところだったそうだ。むかしの山小屋もまた、登山家が仲間同士であつまるなじみの場所であった。かつて山小屋の番人には、山をよく知っている年季のはいった人がおかつたように、歴代のセンター駐在員はいずれもひとかどの研究者たちであった。

だがいまは、登山が大衆化して、山小屋にたくさんの人びとがおとずれるようになったように、アフリカ研究も多様化し、さまざまな分野と機関の研究者たちがセンターをおとずれるようになった。かつての山小屋をなつかしむ人たちには、いまの状況は心地よくないかもしれない。かれ

らにとて、山小屋にはすでにサロンの氣やすさはなく、そこにあるのは、かれらが「下界」とみなすかもしれないところの公共的空間である。

わたしは、はなはだたよりない小屋番だが、この仕事についてよかったですとおもっている。センターには毎日のようにさまざまな分野の研究者がおとずれる。かれらと接することはたいへん勉強になるけれども、じっくりと対応するにはあまりにも目まぐるしい。いっぽう研究者をふくむアフリカ人たちとは、隣人として関係をたもってゆかなければならない。この日常はどうみても、「山」というより「町」のそれである。実際ナイロビはとても大きな町である。わたしはこれまで、どちらかというと、アフリカの都会よりも田舎がすきだったが、いまではこのいそがしい町のくらしをたのしんでいる。

結局、ナイロビ・センターを山小屋にたとえるのは、もはや時代おくれなのだろう。しかし、いまも山にあこがれる若者が存在するように、わたしはいまでも、アフリカ研究に対してあこがれの気もちをもっている。日々すれちがう研究者たちと、ともにすごすアフリカの隣人たちから、すこしづつでもなにかをまなびたい。それが小屋番のねがいである。

Serving the Diversity: Daily Life at the JSPS Research Station

ADATI Tarô (JSPS Research Station, Nairobi)

JSPS Research Station used to serve as a salon for Japanese scientists in Nairobi. They had rather limited fields and affiliations such as anthropology and geology. The character of the Station has been changed along with the recent development of African studies in Japan. The more diverse is the scope of African studies, the more varied the scientists' demands are. The Station now is a public space that provides convenience and academic information for scientists of any fields. Thanks to such diversity, I really enjoy serving them as a host of the Station. I hope to learn from them, both Africans and Japanese, the essence of African studies through my daily experience here in Nairobi.

センター・ニュース

できごと

7月

- 1日 番犬のJunior（1歳）が子犬を7匹出産。
- 6日 宮本律子氏（秋田大学教育文化学部、言語学）来訪。
内村直之氏（朝日新聞東京本社科学部）・中野智明氏（報道写真家）来訪。
- 石田英実氏（京都大学理学部、自然人類学）・中野良彦氏（大阪大学人間科学部、人間生態学）来訪。
- 7日 清水大輔氏・辻川寛氏（京都大学理学部、自然人類学）来訪。

- 8日 Naomi Maina 氏（ケニア・トリパノソーマ研究所、薬学）来訪。
- 16日 安渥・足達両駐在員、ケニア国家科学技術評議会（NCST）に J. Mani 氏（学術事務局長）を訪問。J.E. EKirapa 氏（ケニア大統領府、内務次官）とともに NCST と学振との交流の活性化について協議。
Omedo Misama 氏（ケニア Stand of Minority Ethnics 代表、国際法・少数民族問題）来訪。
- 19日 佐藤宏明氏（奈良教育大学、昆虫生態学）来訪。
J. Mani 氏夫妻、J.E. EKirapa 氏、A.G. Kaaria 氏（ケニア大統領府、内務次官補佐）を招待して夕食会。
- 21日 八木繁実氏（東京外国语大学アジア・アフリカ言語文化研究所、応用昆虫学）来訪。
John Geofrey Mugubi 氏（ケニヤッタ大学文学科、日本文学）来訪。
- 22日 菊地滋夫氏（明星大学人文学部、社会人類学）来訪。
- 23日 太田至氏・波佐間逸博氏（京都大学アフリカ地域研究センター、人類学）来訪。
岩川千秋氏・保坂延彦氏・黒江健一氏（IOS AFRIC、番組撮影）来訪。
- 24日 Maina Ngotho 氏（ケニア・トリパノソーマ研究所、寄生虫学）来訪。
- 25日 高須啓志氏（神戸大学農学部、昆虫学）来訪。
中務真人氏（京都大学理学部、自然人類学）来訪。
第130回学振セミナー開催。参加者60名。セミナーのあと屋外にて懇親会。
- 26～30日 安渥・足達両駐在員、北ケニアの文化生態学的予備調査ならびに日本人研究者の調査現場視察のため、ケニア Samburu および Marsabit 地方を訪問。
- 27日 大倉三和氏（立命館大学大学院国際関係研究科、開発社会学）来訪。
- 28日 北村光二氏（弘前大学人文学部、人類学）・河合香吏氏（静岡大学人文学部、人類学）来訪。
- 30日 Geoffrey Kilili 氏（ケニア在来知識資源センター、民族生物学）来訪。

研究者往来

- 石田英実氏（京都大学理学部）7月5日～8月4日、文部省科学研究費補助金国際学術研究「東アフリカにおける類人猿の進化と人類起源の研究」による北ケニア Samburu Hills 地域の発掘調査のためケニア共和国を訪問。
- 中野良彦氏（大阪大学人間科学部）7月5日～8月18日、文部省科学研究費補助金国際学術研究「東アフリカにおける類人猿の進化と人類起源の研究」による北ケニア Samburu Hills 地域の発掘調査などのため、ケニア共和国およびマダガスカルを訪問。
- 宮本律子氏（秋田大学教育文化学部）7月5日～8月29日、スバ語およびトゥルカナ語の音韻構造に関する基礎研究のためケニア共和国 Homa Bay District ほかを訪問。
- 太田至氏（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）7月23日～9月27日、カラモジョン系の牧畜民・農牧民の諸社会に関する広域調査および放送大学の番組撮影のため、ウガンダ共和国北東部およびケニア共和国 Turkana District を訪問。

中務真人氏（京都大学理学部）7月25日～10月12日、文部省科学研究費補助金国際学術研究「東アフリカにおける類人猿の進化と人類起源の研究」による北ケニア Samburu Hills 地域の発掘調査などのため、ケニア共和国およびマダガスカルを訪問。

河合香吏氏（静岡大学人文学部）7月27日～9月30日、カラモジョン系の牧畜民・農牧民の諸社会に関する広域調査のため、ウガンダ共和国北東部を訪問。

北村光二氏（弘前大学人文学部）7月27日～8月28日、カラモジョン系の牧畜民・農牧民の諸社会に関する広域調査のため、ウガンダ共和国北東部を訪問。

はじめまして（研究者自己紹介）

大倉三和（立命館大学大学院国際関係研究科研究生）

7月末から約半年間（99年1月まで）、ケニアに滞在いたしますので、その間、どうぞよろしくお願ひいたします。今回の調査では、小農民がどのような論理にもとづいて契約農業に取り組んでいるかについて、国家や資本の性格との関係において明らかにしたいと思っております。調査地は確定していませんが、近年輸出が増大する花卉ないし青果物の契約栽培地域を取り上げ、聞き取り調査に入る予定です。

波佐間逸博（京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程）

ウガンダ北東部に分布する牧畜民・カラモジョンを断続的におよそ2年間、フィールド調査する予定です。今回はこの8月からおよそ1ヶ月間広域調査を行い、調査地を具体的に決めた後、来年の3月いっぱいまで彼らとともに暮らします。カラモジョンの対面的な相互行為を、社会関係との関わりにおいて分析したい、という希望を持っています。相互行為のどの部分に記述の焦点を絞るのかを決定する作業は、今回の調査で彼らの実際の振る舞いの様子を見てゆくなかで行いたいと考えています。

学振オフィスのイヌたち

今井一郎（弘前大学人文学部）

「ナイロビの経験は自分にとって何だったのだろう？」と時折思い起こしてみる。私は1996年度に1年間家族同伴でナイロビに滞在し、学振オフィスの運営に携わった。日本ではまず会えない人たちと親しく言葉を交わし、オフィスの内外で起こる様々な出来事をひとつずつこなす経験を積んだことは自らの肥やしになったと思っている。

ナイロビの学振オフィスを切り盛りするのは煩雑な仕事だ。現在の建物は老朽化が著しく、根本的な修理を要する箇所が多くある。市街域の拡大に伴い、オフィスが立地しているチロモ界隈も決して町外れとは言えなくなった。近年ナイロビ大学チロモ・キャンパスのはずれに葬儀場が出来たこともあり、オフィス前の道を行き来する人と車の数が増えて周辺の治安の悪化が懸念される。私はここで、1年のナイロビ暮らしの中からオフィスで飼っていた番犬にまつわる事柄を

述べていきたい。

ナイロビ市内の一軒家では敷地内に大型の番犬を数頭飼うことが常識になっている。日本では狭い敷地内に1、2頭飼うのが精一杯だから、多くの駐在員にとって初めての経験である。ところが番犬の飼育には金と時間が結構かかるのだ。相手が生き物であるから手を抜くわけにいかない。私は1980年以来何度もナイロビの学振オフィスを訪れてお世話をってきたが、実際に駐在員になるまで、イヌの世話のために毎日これほど手間がかかることを知らなかつた。

まず、当時5頭いたイヌたちの食事用にウシなどの骨付き肉、内臓や脳などを3、4日に1度、イヌ用のウガリ粉を半月に1度位の間隔で買わねばならない。普段の世話は現地雇用のスタッフにやってもらうにしても、彼らが不在の時は必要に応じて私自身がイヌの鎖を外したり繋いだりすることになる。

コラというオス（当時5歳）は警備会社から派遣される夜警に対して噛み付き傷を負わせたことが何回かあった。私は、夜警が噛まれるたびに消毒液、紺創膏などを用いて救急治療の真似事をさせられた。負傷した夜警の精神的な動搖が激しい時には予防接種の証明書まで持ち出して気を落着かせようとした。イヌ同士の間でもよく騒ぎが持ち上がって往生させられた。いつもコラがキビ（3歳のオス）に一方的に襲いかかる、というシナリオだが、騒ぎの翌朝にはキビが痛々しく足を引きずっているのが常であった。傷がひどい場合には、自動車に乗せてウェストランドの獣医まで連れて行かねばならない。キビは自動車に載せられるのが嫌いで、いつも荷台や病院の診察台で排泄行為におよび、連れていくスタッフの仕事を増やしてくれるのである。夜間はオフィスの庭にイヌを放すのだから、オスの成犬は1頭に止めるべきだろう。

また、イヌたちはオフィスに見知らぬ自動車の出入りがあると激しく吠えて暴れるので、よく首輪や鎖が壊れた。検討の結果ナイロビのペットショップで売られている製品は材料も作りも弱いのだろうということになり、日本から来る人に大型犬用の鎖などを買って来てもらったものだ。しかし、日本製品も相変わらずよく壊れた。

さらに、我々はイヌたちの健康管理にも日常的に気を配る必要がある。定期的な予防接種を受けさせたり虫下し薬を投与することはもちろんのこと、ノミやダニの駆除も必要である。犬小屋付近ではノミやダニが季節的に大発生するようで、その時期には犬たちがしきりに痒がっている。人間にも犬のノミがたかるから油断はできない。犬小屋の周辺を頻繁に掃除してイヌたちにも定期的にシャンプーしてやることが最低限必要である。犬用のシャンプーが手に入らなければ手洗い用の石鹼でもよいが、臭いの強い衣類用の合成洗剤などは犬にとって大迷惑で、論外である。

私はこの小文で、ナイロビの学振オフィスを維持管理する上でもっと重要視されるべき番犬の飼育について取り上げてみた。毒餌を使うプロの手にかかるれば、番犬も無力かもしれないが、現地スタッフの印象としては、きわめて信頼に足るパートナーなのである。学振オフィスが多くの通行人の目に触れるようになった最近の事情に鑑みると、こちらから積極的に番犬その他の防犯手段を保持しているという事実を外部に対して示すことが有効だと思う。将来の駐在員の中にはイヌと接することを好まない人もいるかもしれないが、イヌたちに番犬としての職務をしっかりと担ってもらうために、我々は細かい点にも気を配って世話を必要があろう。

Dogs in JSPS Nairobi Office

IMAI Ichiro (Hirosaki University)

As a resident director of the JSPS Nairobi Office in 1996, I lived with five guard dogs. Along with many other routines in the office, taking care of them was rather a hard job. Feeding them equally, washing them properly, keeping their huts clean, preventing them from fighting each other, studying their social structure, failing to control pregnancy, losing one of them of cancer, and so on.

「あなたがたは差別しようとするのです」 ——あるコンゴ女性の声

語り手 マリー（仮名）

聞き手 安溪遊地（文化人類学、山口県立大学）

コンゴ民主共和国がまだザイールと呼ばれていた 1990 年 8 月のことです。私は、マニエマ州の州都キンドゥの古いホテルのバーでビールを飲んでいました。そこで給仕をしているマリーさん（仮名）という 20 才くらいの女性とスワヒリ語で会話をかわすうちに、にこやかな彼女の問い合わせに答えることができなくなってしまいました。マリーさんの話の趣旨は二つあって、それぞれ次のようなものでした。小一時間ほど日本語の手ほどきをしたあと、マリーさんに頼んで会話を録音させてもらいました。

あなたがたは手の内を見せるのがいやなのです（*Hampendi kuonyesha yote.*）

あなた方日本の研究者は、私たちに対して大変不当な仕打ちをしています。なぜっていうと、あなた方は、私たちの言葉をとても知りたがりますね。そして、私たちの伝統や習慣を知ろうとします。そのくせ、あなた方は、私たちにあなた方の言葉や習慣をちっとも教えてはくれないじやありませんか。そりやあ、私たちは、貧乏です、だけど、あなた方は、手の内を全部みせることがいやなのです。これが、この国の知恵を勉強にきて、私たちの性質や言葉を理解するようになった、あなた方に私が言いたかったことです。

あなたがたは私たちを差別しようとするのです（*Mnatamani kutubagua sisi.*）

それから、あなた方の国では、みんなとても高学歴でしょう。ところが、私を見てごらんなさい。私は高校を卒業して、ちゃんと卒業証書ももらったけれど、ろくな仕事がありません。（注。バーは、毎日 8 時間勤務して、月給が 6000 ザイール、当時約 1200 円）これが、あなたの国なら、高卒や大卒や博士号なんかの資格があれば、就職して毎日いい暮しができます。こんなことはすべて神様が（最後の審判の時に）お尋ねになることでしょう。あなた方は私たちを差別しようと

しているのです。わたしたちはみんな神様のために生きているのです。神様はみんなのたった一人のお父様なのです。それなのに、あなた方は差別をしようとするのです。聞いてもらってありがとう。*Arigatoo!*

マリーさんの宿題を抱えて日本に帰ってから、私が文化人類学を教えている大学一年生たちにマリーさんの問いかけに答えてくれないか、というレポートを書いてもらいました。題して「やりこめられているフィールドワーカーに愛の手を！」

(以下次号)

“Japanese researchers, you discriminate against us!”

A Narrative of a Congo Girl

Narrator: Marie (a fictitious name)

Interviewer: ANKEI Yuji

(Ethnographer, JSPS Research Station, Nairobi)

This article is based on a narrative recorded in August 1990. The narrator was a girl who worked as a waitress in a Hotel in the town of Kindu, Maniema in the Democratic Republic of Congo (called Zaire at that time). While I drank beer we chatted in Swahili, and I listened to her words. After having taught her some Japanese for about an hour, I asked permission to tape-record her words.

Show us what you have in your hands.

“You Japanese researchers treat us in quite a wrong manner. You can speak some of our languages, and want to understand our customs and cultures. Why don't you teach us your language and customs in return? I admit that we are economically poor. But you refrain from showing us all what you have in your hands. This is what I have wished to tell you for a long time, speakers of our languages and researchers of our wisdom.”

You discriminate against us.

“There is another point. I recently finished my high school education, and succeeded in getting a diploma. I am among the highly educated here in this region where there are no universities. As yet I have no job other than being a waitress in a bar! * On the contrary, you are sure to get a good job and live comfortably everyday only if you have a diploma, degrees of bachelors, masters, or doctors. On the Day of Judgement, God will ask you all what you have done. He will judge that you Japanese have discriminated against us. He is the sole Father of us all, brothers and sisters. We all live for Him. As yet you intend to continue such discrimination. Thank you for listening to me. *Arigatoo!* (“Thanks” in Japanese)”

I returned to Japan with her words as my home task. I gave them to the students of her age who attended my class of cultural anthropology. I asked every student to write a report whose title was supposed to be something like "A relief to the defeated researcher."** (To be continued.)

*Note 1. She worked 8 hours a day and 30 days a month at a salary equivalent of less than 10 US dollars, or for about 4 cents an hour.

**Note 2. Ms Christine Mburu, the secretary in JSPS Research Station, Nairobi, kindly helped me to revise an earlier version of the manuscript.

第130回学振セミナー

日 時：1998年7月25日午後2時～4時30分

話 題：「マラリアからの生還—邦人の病気と死亡例からの教訓」

使用言語：英語・日本語

話し手：久保利夫氏（在ケニア日本大使館参事官兼医務官）

要 旨：

1. マラリアが勢いをついている地球上の場所はサハラ以南のアフリカ諸国である。アフリカで邦人がマラリアにかかり、時には犠牲者が出る現状を分析すると、いくつかの要因が浮かび上がる。1)マラリアの情報が不足している。2)アフリカで、邦人がマラリアにかかった時、現地の医師が、邦人のための治療薬を選択しない。
2. 抗マラリア薬を船に常備していなかったため、マグロ漁船の船員が脳マラリアで死亡したり、現地医師からクロロキンというききめの悪い薬を投与されたためマラリアが重症化し死亡したバハレーンの日本人学校教師の子女の事例など、犠牲者がまだつづいている。
3. 人をマラリア（熱帯熱マラリア）に対する抵抗力がある程度持っているグループ（“半免疫”、アフリカ人など）とそれを全く持っていないグループ（“無免疫”、日本人など）に分類することができる。“半免疫”的人は、ききめの弱い薬でも完治するが、“無免疫”的人はかえって重症化（黒水熱）したり死亡（脳マラリア）したりする。“無免疫”的人はマラリアにかかった時、最新のよく効く薬を使って治療する事がもっとも重要である。
4. ナイロビで発売されている抗マラリア薬は10種類あるが、価格をみると、非常に安い薬と非常に高い薬の二極化が著しい。“半免疫”的現地の人は、安い薬でも効き目があるが、邦人は“無免疫”であるので高い

Choice of Stand-by Treatment for Malaria in Kenya (Optimal Drugs, July 1998)

	CHOICE I* (A.D. TREATMENT)	CHOICE II* (C.D. TREATMENT)
DAY 1	ARTENUM 6 TABS	COTECXIN 2 TABS
DAY 2	ARTENUM 2 TABS	COTECXIN 1 TABS
DAY 3	ARTENUM 2 TABS	COTECXIN 1 TABS
DAY 4	ARTENUM 2 TABS	COTECXIN 1 TABS
DAY 5	ARTENUM 2 TABS	COTECXIN 1 TABS
DAY 6	DOXYLINE 2 CAPS	COTECXIN 1 TABS
DAY 7	DOXYLINE 2 CAPS	COTECXIN 1 TABS
DAY 8	DOXYLINE 2 CAPS	DOXYLINE 2 CAPS
DAY 9	DOXYLINE 2 CAPS	DOXYLINE 2 CAPS
DAY 10	DOXYLINE 2 CAPS	DOXYLINE 2 CAPS
DAY 11	DOXYLINE 2 CAPS	DOXYLINE 2 CAPS
DAY 12	DOXYLINE 2 CAPS	DOXYLINE 2 CAPS
DAY 13		DOXYLINE 2 CAPS
DAY 14		DOXYLINE 2 CAPS

* Any prophylactic treatment can be accepted by this treatment.

- 薬しか効かない。身を守る為には、表に示すような高い薬を常備し万に備えること。(表)
5. 邦人にとり、マラリアの危険度は“二重の危険度”である。1)日本で発病したとき、治療が遅れがちで、脳マラリア等で死亡する危険がある。2)アフリカで発病したとき、効き目が悪い、安価な薬を投与されるため、重症化する危険がある。
 6. 最後に予防薬について述べると、これには、メフロキンとドキシサイクリンのいずれかを用いること。いずれを選ぶかは、個人個人でことなる。ちょうど洋服のオーダーメイドと同様に、その人の職業、生活習慣などを考慮に入れて、安全なものを選ぶ。筆者は、ドキシサイクリン(現地の商品名 Doxycycline)を毎日1カプセル内服する方法をお勧めする。
 7. マラリア予防は、1)正しい知識、2)予防内服、3)早期治療の三項目につきる。近年、マラリアは、勢いづいており注意が必要である。

今回のセミナーは、身近で切実な話題であったためか、外部からの訪問者が史上空前の56名(ケニア人35人)に達しました。質問やコメントも10以上にのぼり活発なセミナーとなつた。その後のパーティーは、スタッフ一同の腕によりをかけた料理で、なかなか好評でした。(セ)

The 130th JSPS Seminar

Date: 25th June, 1998

Topic: Surviving malaria, a Japanese experience in Africa.

Presenter: KUBO Toshio, M.D., Counsellor & Medical Attaché, Japanese Embassy in Kenya.

Language: English and Japanese

Summary:

With the globalization of research, business and tourism, the number of Japanese visitors in Africa are increasing in recent years. It is sad to say that there have been cases of deaths from malaria among them due to lack of knowledge and proper medications.

The people born and brought-up in the malaria endemic area have acquired a kind of resistance designated as “half-immune” against malaria, whereas the people born in the malaria-free countries have no resistance to malaria and are thus “nil-immune”.

The local African physicians treat the locals with less potent anti-malarials such as chloroquine. Chloroquine works, because the locals have “half-immunity”.

What happens, when the local physician treat the Japanese with malaria by giving chloroquine? This happens very often as chloroquine is the only drug available in most of the local hospitals. The results are: cerebral malaria, black water disease, D.I.C etc.

There exist double malaria risks for Japanese:

Risk 1 : In Japan, doctors know little of malaria

Risk 2 : In Africa, doctors use chloroquine to treat.

The surviving malaria can be achieved by

1. Self defense, self-treatment (as shown in the table)
2. Armed with knowledge and proper medicine.

This seminar welcomed as many as 56 participants (35 Kenyans), a JSPS Nairobi record, mainly because of the urgency of the subject. More than ten questions and comments were given, and the discussion was very fruitful to all the members who attended.

—センターから—

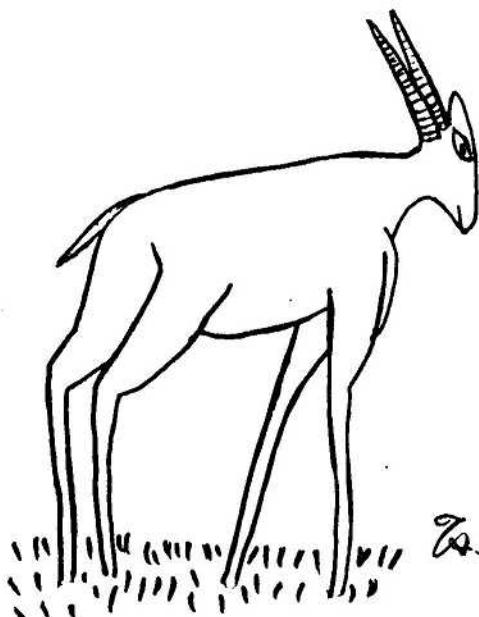
センター・ニュースの愛称を募集しています

前号でおしらせした本誌の愛称募集ですが、現在のところ、Nakereseni（ナイロビ研究連絡センター・ニュースの略）、学振チロモ便り（現在地の地名から）、JEMBE（スワヒリ語で「くわ」の意味、Japan Embassy BullEtinではありません）などの案が寄せられています。締め切りを8月末に延長しました。引き続きアイデアをお寄せください。

編集後記

♪寒かった7月も終わり、そろそろナイロビでも青空がのぞく日が増えました。恒例のセミナー、今回は話題が日本人にとってもアフリカ人にとっても切実なマラリアだったせいか、今までの記録を20人も上まわる大勢の方々の参加があり、会場のオフィスはパンク状態でした。今度は庭にテントを張ろうかなどと考えています。芝生の上のパーティを準備してくれたスタッフとボランティアの方々に感謝します。（遊）

♪「研究者往来」は、調査などでアフリカ各国を訪問する日本人研究者と、日本をおとずれるアフリカ人研究者について、訪問の内容を紹介することを目的としています。これまで原則として、学術研究機関に所属する研究者について、本人の了承を得て紹介してきました。今号から、それにくわえて、研究者本人による自己紹介をのせることにしました。主として大学院クラスの若手や、はじめてアフリカを訪問する研究者におねがいしています。みじかいものですが、研究内容やアフリカの印象など、誌面に新鮮な風をふきこんでくれることを期待しています。（太）



日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター・ニュース 第4号 1998年7月31日発行

編集・発行者/安溪遊地・足達太郎 発行所/日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター

The Bulletin of JSPS Research Station, Nairobi, No. 4, 31 July, 1998. Edited by ANKEI Yuji and ADATI Tarô. © 1998 by JSPS Research Station, Nairobi. All rights reserved. Published by JSPS Research Station, Nairobi, P. O. Box 14958, Nairobi, Kenya. Telephone: +254-2-442424 Facsimile: +254-2-442112 e-mail: jsps@swiftkenya.com